

日向国の琵琶法師

白石 一 美

はじめに

1969年11月22日～24日、宮崎県高千穂町在住の友人の案内により私は同町^{かみの}上野正念寺に宿泊させていただき、同町における語りと伝説の調査をした。正念寺の隣りに、甥夫婦の家に身を寄せておられた当地の地神盲僧内倉義男師も調査対象であったが、おりから不在と録音機材の不備、日数の都合などのため、後日の採録を友人に託して高千穂をあとにした。後に友人より録音テープが届けられ、それを私が文字化したものが本稿の主内容をなす。渥美かを『平家物語の基礎的研究』の昭和36年1月附序文に「……、終始中世平曲の曲節付けを探ろうとする意図が表裏していたのでした。そのために九州瀬高の大江に残る幸若舞曲を採録に出かけたり、筑前盲僧の琵琶を訪ね、また熊本福岡両県境の山岳部をさ迷って、電燈のない家に住む肥後盲僧の語り手を訪ねたのした。」とあるが、本稿は現代における地神盲僧の生活の一端を記録すべく、民俗的覚え書としてこれを草した。文字資料化に際して次の諸点に留意した。

- 1、会話の内容に若干妄説かと覚しき例もあるが、会話内容の省略は原則としてこれを行わなかった。但し、盲僧の説明がくどすぎる条1～2箇所、質問者のあいづちの若干、及び発言の途中に割込んでくる応答語やあいづちなどはこれを省略した。
- 2、解読し難い言葉（文末部に殊に多い）については国語学方言専攻の研究者の援助〔 〕を得た。白石の註・よみ・語義・存疑箇所などは（ ）で示した。
- 3、文字表記に際して、原則として長音符号を用いず、概ね表意（意味・概念）本位とした。
- 4、宮崎の古老にまま聞くことのできる所謂「四ツ仮名弁」についてはこれをかき分けなかった。
- 5、文末における細かいニュアンスなど、文字表記上同一であっても音声上異なる場合がある。表記上、これらに差を与えて記し得なかった。

本稿における話者は内倉義男翁（明治32年生）、質問者は迫田次郎氏（昭和22年生）、テープ解読に吉田則夫氏（昭和20年生）の援助〔 〕を得た。このほか、宮崎市関係の伝説の調査に市内瓜生野在住の結城久光氏の援助を得た。その他、採録にご協力賜った関係各位に御礼申し上げます。なお、本稿は「ある地神盲僧の残した話」（1971年4月6日 白石一美私家版）の増補・改稿である。

語り物芸能としての琵琶を総合的に体系化した書として、其後、1975年11月に日本コロムビア株式会社より発行されたLPレコードCLS5205～10『琵琶〈その音楽の系譜〉』別冊解説書がある。当該解説書閲覧の機会を与えられし本学音楽科助教授松永 健氏ならびに度重なる佐賀の現地探訪に際して便宜を与えられし佐賀大学教授（国文学）米倉利昭氏に紙面を借りて御礼申し上げます。

寒うございますな「ハァ」^{【バックTVニュース】} きれいで、もう、やりなさいよ。「きのう一寸きたんですけど」^{【キノノヨリモ】} ハィ〇〇じゃったとで〇〇へ行っ〇〇もんで……「ふつう、やわた坊ンさん、坊ンさんてえおじさんは、いわれちよっとですけども、あの一、やわたじんしゃですか」ハイ「あすことやっぱり関係が……」ハイ それででん、昔ああ、武家政治^{【ヤレマセンヨ】}の頃からやわたちゃあ有って昔ああ、あすこあ、やわたざんけいそく寺^ち(¹)ちゅうお寺じゃたつてす。

「けいこく寺」ハイけいそく寺で「けいそくですか」ハイ「にわたりのあし……ハイハイハイ」鶏足寺、天台宗の天台宗のお寺じゃの、あの山伏とか、私たちが、荒神ばらいをするんがあすこで修業してですな「ハイハイ」して西うすき西白杵郡中どっこも、そのしもの八幡鶏足寺から西白杵郡にどっこんまわりで経よみに出よったとですたい。「ハイハイ」昔はな「ハイハイ」そして、よんで回ってから又、その八幡に帰ってあそこん、あの坊主の住まう所あ長屋がつくってあって15人位、昔はおったもんじゃ……そして眼のいい人が、その八幡は15代続いたとこでやんすな「ホォー」^{【TV音楽】} ずうと代が15代続いて代々の住職が居らしたつてすな、こうばる、こうばるみようじのとこ^{ほし(2)}(³)が八幡の先祖でありんすな、八幡履歴を良う調べなすつとあ、あん、このしもの八幡の、八幡神社のそばにいて聞かすと神原、神原名字の、ムム……、神原という名字がありますの。「ハイハイ、神原という墓が沢山ありました」その墓^お(⁴)を調べてみらすと大方あの、あの、お寺の履歴が分りますあ「ハァ、しかし、その神原^お(⁵)という人がもう何か、お医者さんか、な何かになって……」ハイ、お医者になって坊主はもうずっと、明治の、明治になってからも坊ンさんは、あすこはおらんとでやんす、「だから……」そして……、「だからどっか行っちゃって……」ハイもうよそ^お(⁶)にいて、あとは家は人に……、やってありますな。「ハァ」墓があるだけで、家はあって人間がもうかわって^お(⁷)いますあ、明治の世になってからも八幡神社の人は坊主はしてらっさんわけでありますたい。お医者になったり、先生をしてみたりしてな、え、そん昔あ、八幡山鶏足寺のお寺があったとじゃが、この神様と、天台宗は祈禱をしますもんじゃけな、祈禱寺じゃけ神様もまつれば八幡様もまつれば不動様もまつる。阿弥陀様もまつればお釈迦如来もまつる。かんぞをんもまつる。神仏一緒にまつって、そして祈禱するとが天台宗のぢじんもうそうでありますたいの「ハァ地神盲僧ですな」ハイハイ めくらの盲僧、そして眼のいい人は山伏^お(⁸)があすこで稽古したです、昔。してからそん、こんだ、明治になってから神道が盛んになって、あ、あすこ、八幡は八幡様を、神様を本尊にして、仏は阿弥陀釈迦観世音を信心してな、そいじゃっけんどん、お寺を廃止して八幡神社にしたわけです。神社になって、そして私どんがよなもんはこんどあところがかわってから延岡に、延岡の山下、^お(⁹)町ちゅ所にじょうまん寺^お(⁷)ちゅお寺があります。「延岡の山下に浄満寺ですか」ハイ浄満寺、山下町の浄満寺に今度あ取締りがかわって、「ハァハァ」この西白杵郡の取締りが延岡になったわけです。「ホウ」八幡はそいじゃけん、関係は無えごとなつたわけです。「ハァハァ」浄満寺の私もあ、その、一緒^お(¹⁰)なつて取締りが浄満寺なつて、「ハイ」そして一番の盲僧のかしらは鹿児島^お(¹¹)のじょうらくいん^お(⁸)ちゅとこが盲僧の一番、一番かしらの寺です。「ハァ常楽院ですな」ハイ鹿児島^お(¹²)の常楽院で。こっちは取締りたいな、その延岡は。「ハイ浄満寺」ハイ浄満寺は取締り。「ハイハイ、ハハァ」で、そして選挙して、取締りは盲僧中で選挙して、取締りは盲僧のうちから取締りをするもんが、選挙して延岡の浄満寺に、かわるがわるでくるわけでありますたいの。「ハァハァハァ」

「大分とか熊本とか福岡あたりにはやっぱり地神盲僧やられる方がおられます?……」

ハイ ハイあます。熊本県の阿蘇郡【アソー】だけがこっちと一緒であります。「ハア ハア」阿蘇郡だけが西臼杵と一緒で、「ハイ」ほかはあっちの筑前の筑前の筥崎付近【じえん】⁽⁹⁾にありますな。その盲僧の寺がしらのとがあります。ムム、筑前筑後福岡県だけはあっち【ちよ】なとりますな。で、鹿児島と宮崎、鹿児島県と宮崎県と大分県と三県が一緒じゃ。「ハア ハア」

そしてそん延岡（白石注 鹿児島）の常楽院が一番のかしらで、「ハア」本山の比叡山【エンレキジ】たいな、天台宗は比叡山の延暦寺【エンレキジ】でありますな、で、本山に〇〇、盲僧の一番のかしらが鹿児島で、そのそん、鹿児島はとりつぶして本山に【ナガトクルトデアリマヌナ】坊主の（以下、少々不明）「ハア ハア ハア」「そいで宮崎鹿児島あわせて何人ぐらいおられるんですか」ハア、ちょーと覚えとりませんけんどん、宮崎と、ムム、昭和十七年と八年に講習がありましたのが。「ハイ」その時、ムム、あつまったとが、延岡で講習がありましたのが。「ハイ」その時や、宮崎・鹿児島からも全部は来んとじゃありましたのが。「ハア」わずか来てもろて、本山からもおいでになって講習があつたけど、五十人位【く】おりましたかな。「ハア そおオですか」で、昭和17年の時に西臼杵郡と阿蘇郡で、ええ20人位【く】おりましたの、やっぱ、よそから来た人の方が多うございました。30人、「ハイ ハイ」やっぱ、け、県内で〇〇〇しらべてみませんけ、分りません。県内じゃ。やっぱ鹿児島と大分とすりゃ大ぶんなります……「ハア」……

（録音休止）

「今おじさんは何歳ですか」（老人 咳）明治32年、72歳でございます。かぞえの、かぞえの72歳です。「……と」満じゃまんたいっちゃけんな。「ハイ ハイ」かぞえは72になります。「どっか、そこのうえの、えーと何んていう人ですかね、あの人から習われたて聞いたのですが、……（間）……琵琶の〇〇〇」ハイ（咳）そこに田辺【タノベ】ほうじゅんちゅ人【ノ】がおられましたのが、その人からなろうたつとです。大正2年に弟子ついて15でございましたな。「15で」ハイ「何年間位……」やっぱ、……と、修業したとが3年、そして、あの、認可を受けたたあ21の時でしたな、認可証をもらうたとが。「やっぱり認可証なんてのがありますか」ハイ ハイあります。位【(六)】がむ通りかありますな。はじめはにゅんぜ、それからだいとく、大徳【ちゅ】位【に】になれば、もう師匠をしていいってありますたい。大徳からちょうじょう職【か】たいな。大徳からほうぎょうとかほうじとか、やっぱ六通りかどうか位【(六)】がありますあ。年とるつけ、ずうーとそん、位【か】が上がるごつしてあります。銭【ぜ】を納むれば位【か】は上がってくとたいな。「ハア」盲僧【も】ても（注【モウソウテモ】）西臼杵郡に五人、五人おった【ちゅ】ちゅが、もう今は西臼杵郡で2人ぐらいしかおりません〇〇。今あ3人は死んでしもうて、「ひのかけに一人おられます……」ハイ、な【の】な【の】おり、ひらた、ひらたひで、ひでもり、ひでのりかな、という人がおりますな、日之影【ヒノカゲ】に一人、な【の】な【の】おりのしらせ【の】のいちちゅ所に居らっ〇〇であります。「ハイ」「その田辺ほうじょうという人じゃったつてすかね」ハイ、田辺ほうじゅん、「ハイ、ほうじゅんですか」ハイ田辺ほうじゅん、「その人はどっから習われたんでしょうか」その人はやっぱ八幡で、「八幡で」八幡の、やっぱそんその人が習わす頃は、もう八幡神社に、八幡は神社になっ【ちゅ】ちゅって、八幡で稽古した人が、「ハイ」ムム、八幡で稽古したほうざんほうざんちゅ人【(七)】が【オル】おらした、八幡で稽古した人が。「ハイ」その人が、あの、八幡【村】村に、よその家【か】をかっておらしたとでありますたい。「ハイ」その人から、そのほうじゅんちゅ人は習わしたとです。「ハア、ア」して、そん、ほうじゅんちゅ人【(八)】になれば、「ハイ」八幡のお寺で稽古【(九)】した〇〇であります〇〇。その人の師匠【(十)】がお寺で稽古〇〇。「ハイ」明治の前じゃけな、「ハイ ハイ」もう、ほうじゅんちゅ人は、今、生きていらせば百、百二十位【(十一)】になる人

であります。わしが弟子ついた時にもう58位になっちゃ(つた人であり〇〇?)〇〇(マヂヤー)その人の師匠じゃけ、「ハイ」そのほうざんちゅ、田辺ほうじゅんちゅ人の師匠が習わした頃までや、まだ八幡がお寺じゃったす。鶏足寺ちゅお寺じゃったす。「ハイ ハイ」そして、そのお寺が廃止になって、神社になったけ、今度あ人家に、よその家を借っておって修業に(廻)ま……、かみの、田原に修業にまわらしたわけ(下野)で〇〇「ハア」そしてほうじゅんちゅ人のもとしもの生れ、八幡神社の近所に生まれた人でありましたけんも?どん、その人は、ムム、二十七位でめくらになって、「ハイ」そしてならわしたとで、次男じゃったけ、ここん家に、家をつくっておらしたと〇〇(でりやう?)「昔、あの竹田(白石註 大分県竹田市)ですな。あすこあたりまで行かれたていう話、聞いたんですが……、昔って、そん、……昔の、……盲僧……」盲僧がな、ハァ、そら、ハァそういうことはあったかも、ハイ熊本県に〇〇〇行けば認可証をもっちゃれば、かいこく(10)かいこく修業認可の証じゃけな、そん認可証がな、かいこく修業認可の証じゃけ、たけたに行つてん熊本に行つてん、いいてありますたい。「かいこくって……、どんなですかね」字はよく覚えておりませんが、かいこく修業認可の証ちゅいえば、こう日本中をまわつ、どこ(行)にいて、やとわるれば(行)いてもいいちゅことで〇〇〇「ハア ハァ」むこうが来てくれと言われれば、いていいちゅ、自分の 自分の、その支配のうち、うち、自分がま上野かみの村なら上野村を三百軒まわる。田原村を三百軒まわり願ネガイシテタいしたたあ 自分のマア壇家ちゅわけでありますたいな。けんどん、そこは 300軒なら 300軒、上野 300軒、田原 300軒、600軒は自分のまわるとこでございますて願スツチい書あげちくれれば、上げちゅれば、そこにヤやとわれんでん、順番に、ムム、自分の方からおしかけていていいてわけですたい。「ハハァ」けんど熊本県とか大分県なれば、竹田とか、大分県なればやとわれなあ自分から行ておはらいや荒神ばら(そらいつた所で)いするわけにゃいかんちゅわけです。じゃけ、昔の人はそえた所(いつた所)で〇〇(イタドコデアリマクネナ)竹田な竹田にやっぱ、その盲僧おるとでありますけの。「ハイ」竹田の、その大分の方に、それじゃけそん、自分の壇家ちゅ行かれんわけですたい。やとわるればいくうちに人が来てくれち言え行つて、行つてもいいちゅわけでありますたい。行けば、竹田の方からこつちに来てやっぱ祈禱をしたり、やとええそん竹田者のもの者がこつち来て……「ハハァなるほど」

一 白石 中略 一

(……略……) 同し坊主の位をもっちゃればの。「その位はどこが認可すつとですかね」そりゃやっぱ鹿児島です。「鹿児島で、ハハァ成程…ハハァ…その上の位のどこまで鹿児島で」ハイ? 「どっから上は比叡山で、ていうわけになつちゅくれるつとですか?」鹿児島が比叡山に願うとでありますたい。そして比叡山からそん位の書いたとをくる(さ)わけです。やっぱ、ちゅうに覚えちよりませんわ その、格式はもつちよてなあ、ムム、目が見えんもんじゃけ、格式はそこで〇〇〇〇

あの、今度は琵琶のことに關してですけど、あの、琵琶は、その、ふる、だいぶ古いごとあつてすが、いつごろから……」ハァ今私が弾きよつたとは、今、よ四十年位なりますな。あの琵琶になつてから、そん前、弟子の時の琵琶と今、持つちよ琵琶は違ないます、弟子の時の琵琶はたんと昔、そのしもの、八幡にあった、もう蟲が喰くて、サヲもハラも蟲が喰つちよつとを弾ひいちから習うたとでございます。昔のは、琵琶は今ん琵琶よりも大きはうございました。ハァ巾が、はやえてん、巾がやっぱ一尺くらいありましたな。一尺以上あつてじゅ武舟分(廣奏するの)にまだぶ(舞)こつに造つてありますけな、琵琶が重(おみい)うして、はやえた(厚)ま、あつ(舞)ございましたな。弾(舞)くとに弾(舞)きにきくて、あん琵琶は私が造つた(の者が)たつてありますな。造つてあところたのと三ガソ(白石註 五ヶ瀬町三ヶ所か)に、三ガソ普請屋

(ん) とが造った(11)とを私がゆずってもろち、そして塗りなおして、「ハイ」塗りなおしてから四十
 年位になります。あん琵琶あ あん琵琶あやっぱ琵琶の経文(ちょうもん)と聴こえる)というが
 ありますな、琵琶は琵琶の経文が、お経にはお経の経文ちがありますな。「ハイ ハイ」で、琵琶は
 経琵琶と、ムム、薩摩琵琶と肥後琵琶と、それと筑前琵琶と四通りありますな。で、その琵琶(12)が
 4通りあるとで、やっぱ私どんが琵琶が一番古いてありますな、……経琵琶が。「経琵琶が」ハ
 イ、経琵琶がな。お経を読む琵琶たいな。お経の琵琶は、こんろしろにしゅみせん須弥山の山にたとえた
 ちゅ、こう、あたまん所がこう烏帽子のごとなつちまな。後ろが、「ハイ ハイ ハイ」後ろが、
 あれが筑前琵琶やら肥後琵琶 薩摩琵琶にありませんな「何にたとえた…… しゅみせん須弥山の山にた
 とえた……？」 ハイ、しゅみせん須弥山の山にたとえた、「しゅみせん須弥山の山」ハイ 「こりゃ中国に
 あつとですかね」 ハイ 「ハイ ハイ」中国たい、しゅゆせん須弥山の山にたとえた…… はら(は)あおお
 ごの如来、琵琶あ七人の如来にたとえたと「琵琶が7人の如来」如来に、そいで、こん経琵琶と歌
 琵琶は違うちゅことはもうこの後ろうしろの頭にある所がこう、烏帽子のごとなつちまんな。あれは他
 の琵琶にありませんな。「ハア」筑前琵琶でん肥後琵琶でん、むつたい、頭がこう、三味線の○
 ○○、そいで経琵琶が一番琵琶で古いっ○○○。琵琶はその地神経○○○、天台宗の伝教大師が、伝
 教大師ちゅ人が、支那の、支那の天台山ちゅとこに渡られ、そして、どうすいお和尚ちゅ人について
 修業して帰られ、そして、地神経を、荒神ばらいのお経を作らしたとですな。そして今、琵琶は一
 番ふりこつを言えば、やっぱ日本の鳴り物ちや、一番古っちゃけん。で、琵琶のお経のわけにいう
 ちゃつとが、釈迦如来が、その釈迦如来が、その、つくられたもの…… 「琵琶を、ハイ ハイ」
 ハイ、お経のありますの、そして支那から印度に、ムム、支那から、いや印度から支那に○あつて、
 支那から日本に琵琶は渡ったもんです。「成程」伝教大師が、大師様が、その天台山で修業して
 帰られ、その地神経という、そんめくらには、こんお経お経をおそえる。で、眼のいい人は山伏な、あ
 のホラ貝を吹いて祈禱しますな。あれ、あれ、ああいうのおそえらしたとが天台宗です。真言宗は
 弘法大師が真言宗で、弘法大師は尺八のぬがりが弘法大師、真言宗たいな、尺八はなあ、○○
 ○、……

「あの、このあたりに、あの、お茶屋ちゅうとがあつてですがね、真言宗の」真言宗のお茶屋で
 す。ハイ、お茶屋といやあみな御大師さんです。真言宗から、真言宗信者がお茶屋をつくっちゃつ
 とでありますたい。どこのお茶屋でんなあ。「それだけ真言宗徒がまだ多いわけですが、こっちは
 」ハイ? 「真言宗徒が多いわけですがね、こっちは」 いや真言宗のお寺ちあこっちにあありま
 せんな 「ないですがねえ」 ハイ、西臼杵郡にありません。西臼杵郡にあるとは天台宗、禪宗、
 法華宗、真宗な、宗教あ三つ位じゃな、「ハイ ハイ」真言宗はアノこっちにあるとこあさせ
 ばや高森にあるかもしれませぬ。真言宗の祈禱寺がな…… 真言宗はそん高野山(行)にいて位もろて、
 講習で1ヶ月、紀州の高野山に行かんなりませんな。じゃけ、真言宗信者は多うございますたい。
 お茶屋なんか、真言宗信者のこん村ん者んが作ったつとでありますたい。お茶屋はどこのお茶屋
 じゅん、お経はまああんまり知らんもんがつくっちゃつと。お大師さんのいわれはマテ、こういわれ
 ちゅことはしらん知らんづくにつくった人が多つてありますな。「あの、新四国八十八ヶ所回りち
 ゅうのが、あの、染野そめののあたりにあつたですがね、茶屋の中で、それでそんこらあ四国のこんびら
 様ですかね。あすこでこう色々まわつとがあつてですがね。あれの系統を引いちゃつとかなと思つて
 …、思つちよつたけど…」いいえ、そういうわけでもねです。新四国ちゅうとはそん、ここにこの
 田原上野(田)の人が話しおうて新四国という八十八の、そん、だんをつくつたちゅわけです。ハイ、○

○、染野が何所ちよ? (白石注 第何番札所の意カ) とかな、ムム、かわちが何番とか、88を作ったとが新四国でありますたい。○○○じゃけ、88を新しうここに信者がつくってこういうふうにして参ろじゃねえかわちと書いていうて、お茶屋お茶屋を参ったもんでやんす。昔あお大師さん信者が盛んな頃ナに、今から20年前ごろは真言宗がえらいムム、真言宗の坊ンさんが来て、御詠歌とか和讃とかおそえて村々に寄せちから、指導してから、やっぱ、遍路どの姿で田原、上野をやば、お経をよんでバじんをみんな振って参った事実がありましたな、「ハハハ、そう○○○」 その頃やっぱムム、新四国ちゅうをつくったもんでありますたいな。河内新四国ちゅうがやっぱあって染野やら南、それからかわちのかしおのとか、え、どこそこ、やっぱムム、その、新四国何番ちがつくってありました。(高い所)山にもたけとこでもセメン(セメント)で造ったお大師さまをまつてなあ、けど、今、もう信者が、そういう祈禱をする信者がおりませんもんじゃけな、「ハイ」 前は祈禱する信者がかわちのまと○○ちゅう人がおりました。その人がえらいおんどを取って信者を作ってから、そん新四国とか何とかつって、まあ、22万円、えらいはずみましけど、「ハウ」 いま、もうおとろえちしもうち、お茶屋があるだけに、○○○お経を(アツマ)(あまり)もあまりおりません。御詠歌もい人もあまりおりませんが、お茶屋だけは(今もカ?)(の)まあ無うならで村々でまつりますたいな。「その茶屋、茶屋は二十年よっか前に出来たんでしょ」 ハイハイ茶屋は、もう、やっぱ、ずっと以前に、もう百年も前からやっぱ、お大師さん信心する者は村々のお茶屋をつくって、「ハイ」 悪うなれば又、新築してな、そして瓦を上げたりしてやっぱ、そして、ありゃ村の茶屋でありますもんな、「……」 秋原なら秋原村、まぎのしたのまぎのひりろ?(松の下?)下村、とりごえは鳥越村に、お茶屋はたいがいありまなあ、「……」

西臼杵でやっぱ、五つ村があれば五軒お茶屋がありまなあ、田原の方は割合に少のうございます。「あの、茶屋ちゅうとは何でつくったわけですかね」 ハア? 「何をするためにつくったわけですか」 お茶屋はそん、お大師さんのムム、命日をムム、命日に参詣するためでありますな。「ハア」 大師さんは、じょうわ、じょうわ二年のムム、承和2年の、20……、21日に死なしたもんでありますたいの、それで承和2年のやよいじゃけ、承和2年の……、「3月」 3月21日に死なした。そいで3月21日にお大師さんに村々もん者が集って、信心する村は集って、お接待をします。春は赤飯、あ、あずき、あずき御飯をつくって、そして、その、あの、世話人ちがその村において寄附をして、その、あずきやら米やらもろうち、そして世話人がお茶屋にいてお接待をしますあ。そして村ん者が、こん村ん者が、みんな子供も年寄りもみな参って、「ハイ」 そしていただくちゅうわけです。「ハイ」 そして、さん、ひちがつ21日がまた命日じゃけに、7月21日にまた集って、その7月は小麦でふくらかしをつくって、「ハイ」 してお接待します。それがお大師さまのまつり日ですな、死なした日をまつるといふ、3月と7月、「3月と7月」 それもそん村々にお茶屋があって、せん村もあります。「ハイ」 そん、その村の信心の気持で、「ハァ」 此ん村はた(イトコヘンデモーション)(マセンモノ)(オチヤヤアツチモ)たいがいしますが、田原のとこの北い行くと○○○○○○○○○ただ参るだけで、「ハイ」 その21日にちょっとまあ参るだけ、「ハイ」 お接待をせん村もあります。大体からいえばそんお大師さまのまつり、死なした日をまつるために○○○○お茶屋ちゅうもんはある○○○○そしてまあ信心する者は、まあ、参って、その(無)たのむというわけでありますたいな。「ハァ」 たのむ心のね者はたのまんちゅうわけで、「ハァ」 いつでもどこでもそれはお大師さんの命日をまつるためにお茶屋は出来るとでありますな、どこでも。「ハァハァ」 21日じゃ、今日お大師さんに参らなつてな、「ハイ」 わけでありますたいな。 一間—

「あのう、きとう、お、おじさんが色々こう祈禱しやるでしょう」 ハイ 「あの内容はと、

ん、どう、どんなものが含まれちゃうわけですか 祈禱するそのお経でございますか。「ハイ、内容は」 お経は、「ハイ」地神経ちゅうお経⁽¹³⁾よんで、「ハイ」そしてぼんちゅう経をたのんますとい〇けですたいの。「ハイ」 「この家のぼんちゅう経」 ハイハイ、この家の災難は大難は小難にのがらせて下さい。小難は無難にのがらせて下さいというわけですたい。それから、そまつな出来ちゃうことはどうぞこらえて下さい。こらえてもらうようにお願いします。「ハァ」それが祈禱の道でありますの。それを前にお経、琵琶を弾いち、お経をよみ、1時間よむお経もあれば、「ハイ」それから1日よむお経もあります。1日に4回よむお経と、ええ、ちょ、ちょっと1時間近くよむお経もあります。2通りあります、祈禱するするお経は。 一 間 一

それから、うら、うらないも少しされるて……」 ハイハイ、占い⁽¹⁴⁾ちゅとは、こら、はっけちゅう、その易のほうを習うちゅうとでありますの。そん、八卦で占いはします。「ハァ」 ケン、ダー、ケンダー、リー、シン、ソン、コン、グン、クン^(ハ)あつありますな、はっけが。「ハァ」その八卦で判断して、これあこういうわけじゃろ、そういうわけでございます、いうわけですたい。「ハァ」 で、神さまにお願いして、この八卦でどうぞおしらせ下さいますように。そして、そのじゅずで八卦を起こすとでありますたいの……、数珠をこうにぎって、こう、数珠の玉を、親玉をこう、こち握って、するところ引きまさあの、「ハイ」 そして4くわい入れち、4回こう引くと、1回ずつ、こう数えまさあの、こう、[- シー ロク ハチ トテ コレ] 15あつたもんとするかな、そん次の13、そうすつと28でありますの。そん、次、12でれば40になりますな。「ハイ」 その次に10でれば50になりますな。ご、4回引いたものを8で割るとでありますたい。「ハァ」で、50になったときには、ろくは48で2残るたいな。2残るその2をケン、ダーじゃけ、ダーのけんの所で判断するわけです。「ハァ」 ケンダーじゃけ、ダーが2のけじゃけ、ダのけで判断して、ここはダのけじゃ、病気ならおみとかかりとか、失せもんなら出るとか出らんとか、走り人はどっちの方とか、「ハイ」 そうして、この、ケによって判断するわけです。「ハァ」 その、そん、むころの頼みによって、「ハイ」 そいじゃけ……、八卦に分けよう、ちゅうに全部知っちゃうらにゃ出来ませんな。「ハァ ハァ」 神様からこうおおせになること、ハイ ハイ分りました、パイちからお経よんで、こうしちゅうて、そうしてそん、神様が上から言わたごち、いう人もありますな。わたしどもはそういうこたあ(盲人 笑声)神さまから聞くちゅことはありません。神様をお願いして八卦は起こすけんど、「ナルホド」 やっぱ、祈禱は様々にありますな。ごへいをこう振って、神様と話すごち、「ハイ」 そして判断していう人もあります。「ハイ」

(以下 録音テープ Bトラック)

「昔の、あの、琵琶法師で、ずうっと昔におつたつてすがね。平家物語⁽¹⁵⁾とか語る、ああいった語り物ていうのは、ほとんど習われなかつたんでしょうか」 ハイ、そうでございます。平家物語の、あ、ありゃ源氏平家は琵琶をもって、あの源氏も平家も琵琶を弾きよつたもんじゃがの。いみゃあ、宮崎の、ムム、いきめ⁽¹⁶⁾八幡様ちゅて、知っちゃうなさるか。「ハイハイ、生目、ハイ、ハイ」あん人は、ムム、…、平家の大将じゃつたつてな。「ホー」 生目^(ヤに目)八幡様、悪ひち兵え景清ちなあ、平家の大将じゃつたつて、さんじゅ〇〇、そん、私どんがやん目、やん目 やん目をわずろうた人がお参りになるごとに、「ハイ」 ムム、習うたつてありますな。「ハイ」 悪七兵衛景清公は、32歳で国元を御出立、……ムム……定まるところは日州日向の国宮崎郡、きだちさだち⁽¹⁷⁾の御ん寺にとどまりましまして、の、宮崎に、そん来てきだちさだちという寺にそんおつて、「ハイ」そしてその目をくり、黒い目ん玉くりぬいて、そしてそん、そこに目の玉を納めて、目があれば、そん、源氏を又、その、うらみてほろぼさんならん。「ハイ」 目が無かつたら、そん、源氏をう

らみに思わんで、そして目をそん、じ、自分の目を、ムム、目の玉をぬかした人ですな。「ハァー」
 それで生目八幡とまつられた。「ハァーなるほど」 その人が琵琶もっちゃらす。大きな琵琶
 がそん、きだちさだちよ、そん、宮崎郡の生目村に、そん琵琶があるちゅ話を聞きましたがな。
 「ホォー」そして源氏平家はみな琵琶をもって歌よみをして、そして戦さに行く時でも、こないだ
 から、あの、日曜(この日から)の晩(NKK TV)に上杉謙信・武田信玄(の番組)のとがありましたな。「ハイ ハイ ハイ」 あん琵琶
 の音をききなすったな、あん音を。「ハイ ハイ ハイ」 戦さに立つ前に琵琶を弾かす(期?)ごがあ
 りましたな。「ハイ ハイ、ありました」 ああいうふうに琵琶を弾いち、そん、いわいの琵琶
 を、文句を〇〇、そして戦さに立つ〇〇〇〇、琵琶ちゅもんは私どんがお経にもあります。ひちきよ
 うまでは聞こゆちな。神も仏もさんじょうよりうちに来たるべし。琵琶を弾けば、[ソノ、サンジョ
 ーノショブツモ、カミサマノ、ソノ、サンジョー(〇〇〇)キテ、ソノ、チカヨルトイウ、デ、ソ
 ノビワノ(経文)チャーモンニ、ビワワ、ソノ、ビワノオトオ、キケバソノ、ヒャクハチノ、ツノモ、ショ
 ーメツツテ、ソノ、ニンゲンノココロガ(ムム)チョッ、イヤー、ハッポーノオモテモ、イッショ
 ーニナリ、ジューロクノマナコモ、リョーガンニ、サダマリテ、ソノー、ビワノチャーモンニアリ
 マサーノ「はい、はい」ソイデソノカミサマカラ、ミレバ、ニンゲンノ、ココロワ、ソノ、ヤ
 ツノ、オモテガアルト、イウコターアル、ソレガビワオ、ヒケバ(ハ)琵琶の音を聞けば、やあつの顔
 も1つに定まって16の眼(ま)も両眼に定まり、てな。「ホウ」 そういう風にそん、悪も消滅するとい
 うわけたい。「ホウ」 そういう風に言うちゅあるけど、昔あそん昔琵琶を弾くことはそん、
 功德にもなれば、おほらいにもなるちゅわけたい。「ホウ」 琵琶はの、そいじゃけ、やっぱ源
 氏・平家時代からああいう侍が弾かしたとは、みな、やっぱ、歌よみでありましたの。ちよつとい
 えば詩吟と同じかな。「ハイハイ」 いわれが、うたが、謡曲⁽¹⁸⁾といひますたいの。「ハイ ハイ
 、謡曲」 詩吟のような歌よみじゃけ、やっぱ学力のあるもんじゃなからなあ、ちよつと私どんぐ
 らいのもんが聞いちゃ、やっぱそうじゃろうと判断して聴くぐらいで話すごと、やっぱ覚えませ
 ない、聴いたちゅ。「ハァ ハァ」 いわれはそん歌う人に、まあ委しゅ聞かな、分らんわけですた
 い。やっぱ琵琶はそいじゃけ、やっぱそん、神様よろこばす、仏もよろこばすというようなわけ
 でそん、源氏・平家時代、琵琶がたくさんあったちゅらうと思ひますな。「ホウ」 徳川時代
 になると琵琶は……〇〇〇〇、徳川時代にゃ琵琶……〇〇、[アマリアリマセンノー、ハイ、ビワオ、
 ヒイチ、ソノ、センサーニ、タツナン]……〇〇、ホラ貝だけは徳川時代にもあったかもしれませ
 ない。「そこの、この、かみの黒木ていう人がやはり琵琶をもって源氏・平家語りよったって
 いう話聞いたのですが……」ハイ、黒木さんな、「ハイ」黒木さんちゅう人は筑前琵琶を、あ
 あ、静岡にいちよって、それから奥さんが静岡の人で、東京で稽古(じゆ)さしたとな。大学でて、大学に
 いちよって琵琶歌を歌いならしたとな、そいでそん、琵琶の先生してらしたとでありますたいな。
 「ハァ」ハイ、その人はもうはっきりわかる昔の、昔の、今の四十七士の赤垣源三とか大石内蔵
 助な。「ハイ」 ああいう人の琵琶がみな筑前琵琶にありますけ。師匠じゃったいな。その人は
 な、もう死なすったとですな。「もう死なしたですか」ハイ、静岡にいて死なしたとです。
 今、ご、ごとう先生の、こっちの上のごとう先生の奥さんがきょうだいじゃねえかな。「ハイそう
 ですか」たしか、奥さんが、その琵琶を弾きよった、筑前琵琶弾きよった人の奥さんが静岡の人
 じゃったけん。「ホウ」静岡市に、いっぺんこちらに帰らしたとですな。「ハァ」それから年
 よって琵琶も弾かれもんじゃけ、「ハイ」そして琵琶も何も、その人ん琵琶はこう、銀やらあち
 こち立派な琵琶じゃったちゅ〇〇〇〇。「ハイ」そん琵琶はこっちの今山寺の、天台宗のやっぱ、
 こっち〇〇〇〇の今山寺のお寺がありますわの。「ハイ」そこんかわのさんちゅ人のおとつあん

が、かわのちかエエト、エト、やっぱ真言宗の坊ンさんじゃった人で、「ハイ」で、その人は大体真言宗の坊ンさんで、真言宗の坊ンさんじゃけど、ちょっと、ムム、御詠歌の指導坊ンさんじゃったちゃが、「ハイ」で、今山寺の坊ンさんが居らさんごつなって、今山あがった今山に、家をつくって、そして今山において、ムム、その人は、その黒木さんの琵琶を買うてもっちゃらすとです。「今ですか」ハイ「そうですか」ハイ、今でもそこにありますあ、そん、今、かわのさんて役場に出らす人が、おとつあんが買わしたとです。そして、わしが、わしが、わしが、琵琶弾きよるけん、来てから『坊ンさんの琵琶(一寺)ちょっと貸してんない』(と言うので)ちかい、しかし、私の琵琶の方が弾(難)きにきつたい。「ハァ」筑前琵琶の方が音(ね)が……私の琵琶の方が音(ね)が(硬強)がおおございまっさ。「ハァ」歌琵琶は張りがやおして、ちょっと言えば、リーン、リーンち、こう〇〇(オドリ)がありますの、
「ハイ」筑前琵琶の方が。私どんの琵琶はピーン〇〇〇で。「ハイ ハイ、硬いわけですね、音が」そいでとつてからの、習うもんじゃけ、『どおーか、あんたんとは』と私が弾いたら、合わんごつ云わしよったが。筑前琵琶はとう、とう、そん、本職で稽古さっさん(貴方の物は)とつたい。琵琶は好きで買わしたけんど。「ハイ ハイ、ハハハ」とうとう〇本調子琵琶は弾(アンズク)き〇〇〇(弾かんづくにか?)死なしたとです。「ハァ」〇〇、げいしゃ、げいしゃじゃった〇な、そのかわの坊ンさんちゅ。坊主もすれば踊りもする、歌もうたう、踊りの先生なんかも、そうしてやっ(でつかい)たけんど、そん、本師匠につかっさんちゅことが琵琶がほんこしにならんたつたい。これよりでっけかっ(本業 本格的)たつじゃろで。「と、おじさんの琵琶をちょっと聴かして」ハイ「もらえんしょうか」ハイ、ようございます。「お願いします」……(テープ録音切換点)

……〇〇〇、みんなえらい長うかかって調べられたつたい。それがまだやっぱ、高千穂のあれ(つのだ?)に残(と? とる?)っ【テル】ごつてす。〇〇〇、「ハァ」つまり〇〇〇にあつたわいの。「ハァ」これ〇〇さんが言(かくつけ? 書村か?)いよつたが、もう50年前頃、五十九歳て書いてあつちゅけん。「ハァ」調べた人が残しておかしたもん〇〇〇、「ハァ」もうおそらく最後でしょうから」ハイ「あの鶏足寺系統の盲僧(マンナ)ていうか、その、おじさんが最後じゃないでしょうか」ハイ、まあ、そう(でつかい)でございまっさな。もう、(かみのそん)上野村にも私のほかにおりません。私が死ぬればもう弟子はおらん。「ハイ」「琵琶をち(まき?)よつとひかして」ハイ「もらいましょうかね」(テープ録音切換点、以下、盲僧の琵琶演奏による経語り 高校時代の友人による採譜採音を附録として掲げ、私の採詞は省略)

この直後、1970年2月14日、霜ふる早朝に内倉翁は行倒れになって逝去せられた由である。そこはかとなくシューベルト『冬の旅』の「辻音楽師(ライエルマン)」がおもいあわせられる。

註

- 1 昭和15年 関口 泰編『高千穂峰』に「下野村 八幡宮 やはたと云所、別当は八幡山鶏足寺と号して盲僧の頭なり、代々福泉と云名とす、始祖より今の福泉迄74代也といへり、祭神……」とある。

1969年11月23日、白石の高千穂町探訪の際、同町下野聖川(ひじりがわ)佐藤今朝由(げさよし)氏の談に当八幡社々務所の辺りが旧鶏足寺の址の由。そのなごりか、当社正面石段の両脇に仁王と覚しき一對の石像が残され、裏手の小家屋には観音像が蔵せられていた。二、三年前までは琵琶の残片も存した由。

- 2 山伏と盲僧 堀 一郎「平家物語にあらはれた宗教史的要素」(昭和29年 創元社刊『平家物語講座 第1巻』)によれば「(白石注 佐賀県黒髪神社の)別当大智院は既に退転して、語り

部の伝承は尋ねるに由なく、梅野村にはその末寺福生寺が僅かにその檀家に、寶性院と称する盲目山伏が代々盲目の弟子によって相続されてをり、明治中期まで琵琶をひいて祈禱してゐたのが記憶されてゐた……。又別に赤穂山にも円正院といふ山伏寺があったと伝えられ、現存する八十四歳の老婆が辛うじてその最後の姿を知つてゐたが、既に語る物は失つてゐたらしい。」由。

- 3 例 当社近傍に「七十七代 神原勇喜之墓」
- 4 当社近傍にコの字型に数十基の墓が集合。江戸後期のものが多いが、それらの多くは一見してそれと分る僧侶の墓即ち無縫塔（卵塔墓）である。伝燈阿闍梨義海法印大和尚 別に三基の宝篋印塔があり、そのうちの一基はなおよく原形を保つが、一基はもはや台座を残すのみ。
- 5 土地の人によれば子孫にあたる老女が延岡に在住の由。なお当社々官興侶（弥寿彦）家は八代ほど前に神原氏より分家の由。
- 6 当地にはいくつかの熊野神社が存在し、或は山伏に関わるかと思う。1971年3月14日附田氏発白石宛書簡によれば熊野神社に大きい阿弥陀仏を見つけた由で神仏習合時代の名残であろうか。鹿児島県末吉町には熊野山伏が説話管理運搬したかと覚しき景清伝説が存するが、当地ではかかる類例未確認。
- 7 本学事務官川崎喜年氏の中介により宮崎市下北方町在住（土持院）川崎真鏡師より借覧の『常楽院沿革史』によれば、当寺は貞享二年、領主有馬永純が盲僧吉野坊真鏡のために建立した天台宗地神盲僧派寺院の由。なお1969年現在、川崎師は宮崎市における景清伝説の説話管理者的存在である。
- 8 天保14年 薩摩藩編『三国名勝図会』巻第6地神堂の条に詳しい。1969年11月に白石が川崎師宅で伺つたお話によれば、常楽院は鹿児島より宮崎県日南市板敷に退転した由。なお学燈社刊『国文学』昭和44年8月号所収「全国民俗芸能めぐり」語り物の条（111頁）によれば、旧暦10月12日の常楽院大祭には盲僧琵琶の演者が鹿児島県日置郡吹上町田尻中島に参集する由。
- 9 福岡市高宮の（玄清法流）成就院。当院などについて渥美かをる『平家物語の基礎的研究』第一章平曲の発生事情・第二節平曲の発生・第一項盲僧琵琶の注〔二十六〕に「筆者が昭和二十九年一月探訪した時、筑前盲僧＝本山の成就院（福岡市内）は他宗に帰し、太宰府の観世音寺が晴眼者の僧十三人を統轄していた。肥後盲僧＝熊本県玉名郡大原村字小原に盲人玉川教演氏（本名山鹿良之）一人だけであつた。なお肥前盲僧、薩摩盲僧も当時健在していた。」とある。福岡近県の例を次にあげる。

山口県 白石の調査では大津郡日置村古市にある出雲大社教会の前身は善光院という地神盲僧院である。ここに「橘家累世之寶什 / 大正五年五月九日 / 楠公之遺物之楽器 / 六十五歳稲光省三存之」と墨せられた木箱に琵琶の残片が納められていた。「楠公とは？」橘保彦夫人のお話では「楠正成のことでは？」とのことであつた。「楠公一族の位牌・子孫が島根で発見（島根新聞）」（人物往来社刊『歴史読本』特集源氏一族 昭和39年7月号224～225頁）とする伝えもあるが、玄清法印の本姓が橘氏であることも一応注意されてよい。私事にわたるが私の祖母が明治27年7月、日置村黄波戸口の生まれで、1969年3月、私が祖母から聞いた話では当地方において明治中期頃まで琵琶によるおはらいがなされていた由である。

萩市 明治41年山口県下関市生まれの平家研究者永積安明氏の母堂の家が萩市在であり、萩辺の地神盲僧については永積氏が岩波書店『文学』にご執筆であつたかと記憶している。

山口県下全般の藩政時代における地神盲僧の精確な員数については長州藩編『防長風土注進案』全295冊に細かい行政区画毎にこれを挙げている。

大分県 RKB毎日放送の制作部担当、半田明久氏の昭和45年4月12日附書簡による御教示では東国東郡国東町くにさきの地神盲僧も玄清法流とのこと。(現在も琵琶を弾ずる由)

その他九州全般については島津忠夫「筑紫路の平曲」(岩波『文学』昭和37年8月号所収)参照のこと。

- 10 織豊期及び江戸時代に盲僧は諸国をまわり、特殊な例として密偵の如き活動をなした模様である。『西藩野史』天文二年三月二十九日条「前橋旧蔵聞書」他 近世中期、長州藩は藩令を以て盲僧の諸国回国活動に制限を加えている(「萩藩四冊御書附」三ノ巻 地下諸沙汰記 明和3年)。
- 11 専門的楽器製作者は少ない模様であり、時事通信社刊『週間時事』1970年3月14日号によれば、鹿児島県下のそれは薩摩郡入来町麓の吉岡茂之氏ただ1人の由である。
- 12 宮崎市の妙音山長光寺土持院川崎真鏡師所蔵の琵琶に景清遺愛と伝えられる“春日野”があり、1969年11月27日、川崎師宅において白石が模写させていただいた春日野の図を参考までに後に附載しておく。山口県宇部市出身で旧宮崎高等農林学校教授故日野 巖「景清伝説」(『日向郷土志資料』第2・第3合輯5頁)によれば「尚、景清琵琶と称する一派の琵琶は内野環星氏の示教によると筑前系でも薩摩系でも平家系でも雅楽琵琶系でもない一種のものやうであるといふことである。」由。
- 13 『常楽院沿革史』に若干の経文を載せる。
- 14 内倉義男所蔵本に「前田緑堂先生編編纂人事百般大雑書」・「唯神道之七福神」・「真言諸経萬徳集などがある。註7にも関わるが『常楽院沿革史』に「長久山浄満寺日向国臼杵郡岡富村に浄満寺あり、…真鏡は岡富村古川の人にして伊東家に生る初め同郡東郷村山陰なる二色山鶏徳寺第十世の住持山城坊の弟子となり土荒地神の秘法を修め、又頗る易学に通ぜり、貞享二年……」とある。
- 1969年11月28日、宮崎大学音楽科の学生、吉田絹子さんより白石が伺ったお話によれば、祖母から聞いた話として、延岡市湯木はり川に平家の落人伝説がある由。延岡における当該伝説の説話管理者などの委細は未詳である。
- 15 仏説座頭即ち地神盲僧と平曲座頭との関係は平家物語の音楽的側面、とくにその始源に関わることと思われ、註9 渥美書ほか諸説がある。その資料性に問題はあがあるが正安¹³⁰¹3年奥書の『盲僧由来』や延宝¹⁶⁸⁷15年の『盲僧伝来』によれば、九州地神盲僧の拠点の一つとして日向国佐土原をあげ、後者には「日向国佐度原検校 実 祐(判)」などとある。他方、宮崎城主、上井覚兼の日記(岩波書店『大日本古記録』所収)によれば天正¹⁵⁸⁶14年4月20日条に「此日、終日基・将基にて慰候也。佐土原より城宅(白石注 名前から判断して八坂流の琵琶法師であろう)来候。御酒持来候間、各寄合賞翫申候。平家など語候。種々之儀共也。」とある。以上は一例であり、ある時期、ある地点において両者は完全に重なり一致していたのか、それともある地点における水と油の偶然的並立とみるべきか。
- 16 生目八幡神社 宮崎市大字生目亀井山337番地鎮座 当社由緒書によれば大正時代までは剣修の聖地として参集の行者が多かった由。当地は宇佐八幡の開発系莊園ゆえ生目の語源を浮免田うきめんてんに求める説もある。
- 17 神集山沙汰寺 当寺は此地に現存しないが川崎師宅近辺のその旧寺地に景清廟がある。話型上、弘法大師松説話よろしく景清が此地で眼をくりぬき、空へ投げたら生目の地へ落ちたので云々と彼我の地を結ぶ伝説も存在している。

室町末期の『飢餓紀行』や謡曲・幸若舞曲『景清』はさておき、当地における景清伝説の確例は『上井寛兼日記』天正14年10月8日条「又、景清之石塔など懸御目候」である。但し、平和台より北方1軒の山城なる宮崎城を基準とした場合、この石塔の位置は下北方か、瓜生野王楽寺・竹篠方面か、確定しえない。(たけしについては『景清外伝』参照せよ)

- 18 内倉義男所蔵本に梅若流謡曲台本『経正』あり。経正は平家一門中、琵琶に長じた風雅の人。
- 19 亀王は平家物語の増補系諸本などに現れる。
 「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第四輯」(昭和9年3月 其調査会刊)所収「俊寛都僧終焉の地」に「又法勝寺の東二町許り、日蓮宗永源寺趾の田圃に有王塚と称する小高き丘あり、維新の頃までは一畝歩程もあつたが、次第に取崩されて今では一坪にも足らぬ位であるが、其處には有王亀王の二基の塔頭が並んで建てられてゐたそうである。……」(125頁)と。
- 20 重くなるという話形式は類例が多い。その若干をあげれば、『注進案』長門大津三隅村の三隅八幡宮条に「……範頼公……御自害なされ候を當麻三郎と云者御首をとり、密に先守護所なる縁に依て当国に持下り候處、此地を通り候節、御首類に重く相成候故、不思議に思ひ終に此地に塚を築……」とある。1969年3月の調査では、源範頼墓と伝える三隅八幡宮の石塔は高さ2.5 m近く、その形状は鎌倉大倉山の頼朝墓に近似。(別に『鎌倉志』参照せよ) 範頼伝承の類例は広島市立浅野図書館所蔵の近世写本一冊があり、当本には伝承者の年記が詳述されている。山口県豊田町(長門市との境界地点)の安徳天皇伝説(『注進案』)も重くなる類例であり、これは明らかに古墳であり、宮内庁のもと厳重に管理されていた。
- 21 薩摩焼も萩焼同様、その始源は秀吉の朝鮮征伐に関わる。
- 22 1970年代中頃かと記憶するが、俊寛塚は山上への階段を新たに設けるなど大巾に整備され、残った松も伐採された。根幹共通の最後に残った松の年輪は約360年ほどと父より聞いている。
- 23 当地方では「座頭坊だとばさき」という。
- 24 (1969・10月より)2～3年前、火事にあい、同寺は焼失。盲僧は大阪方面に出た由。土地の人によれば、同寺は大寧寺ねいの隠居寺であったともいう。当該時点では焼跡のみ。
- 25 原体 異体字であり山冠、版組の都合で現行活字体に改める。

附 録

俊寛塚について

柳田国男「有王と俊寛僧都」(『定本柳田国男集 第7巻』「物語と語り物」所収 昭和37年筑摩書房)に「俊寛僧都の墓所といふものが、九州以外にもあることは色々の書に載せて居る。たとへば長門大津郡深川ふかはの湯本にも一つ、是は(白石注 文禄の役後)朝鮮から帰化した兄弟(白石注 李リイシヤンクワン勺光と李敬)の陶工の一人、中の倉の茶碗屋阪本高麗左衛門、初めの名をシャムクワン(三官?)と謂った者の墓であらうと、八江萩名所畫會には説いて居るが、土地では果してそれを認めて居るかどうか。もし利害関係者が残って居たら、さう簡単には片付けきれまいと思ふ。」とある。

『防長風土注進案』前大津宰判 深河村之三に「……亀王子孫當代迄十八代程連綿仕候、度々火災に逢ひ追々転居仕、伝来物等一向無御座候、老人の物語には、矢筒様の物又、短刀等右家に所持仕候よしに御座候へとも何の頃失ひ候歟、只今は無御座候……」とある。

1969年3月 白石の現地調査 その塚は別図の如き宝篋印塔であり、国土地理院発行の地図には

俊寛塚と記載。湯本温泉街の最奥(南)大谷山荘ホテルに深川川をはさんで相対し、国鉄湯本駅より三の瀬・四の瀬方面即ち渋木駅方面に及ぶ鉄道線路と道路の交叉点の傍に位置し、川原よりこれを見れば高さ数十米道路より見れば古墳状の十米程度の山の頂上に位置する。註2 前掲論文(133頁)に「俊寛の墓と称する宝篋印塔。中央に死字を刻んである。」と記して写真が掲げられる佐賀市嘉瀬法勝寺のそれよりも大型であり、塔の形式も稍異なり、また損壊が顕しい。塚の管理所有者は数百米ほど川向こう(ホテル側)に居住の亀田三一氏である。そのお話によれば、お寺の亀王⁽¹⁹⁾が俊寛の娘とともに俊寛の骨をひろって西国から帰って来たが、ここで突然骨が重く⁽²⁰⁾なり動かなくなった。そこでここに塚をたてた。私の祖先は代々その管理をしてきたが、明治になって亀田という姓にした由である。また、同氏はその第27代といい、同氏建立の同家墓にもその旨刻まれていた。同家伝来物に黒塗の茶碗(白石未見)があり薩摩焼⁽²¹⁾か支那焼の由。また、塚の傍に三本の松の大本(白石注 所謂俊寛松、実地調査では三本のうち二本は根幹が共通ゆえ実には二本か?)があり、10年ほど前にその一本が倒れた。そこで樹木に詳しい人にその年輪を数えてもらったら約300年⁽²²⁾経た松であった由。

塚付近を調査するに、近傍数10米離れた川傍に「廻国千人塚¹⁷⁹¹(一字不明) 寛政三?七月吉日奉建立 施主赤河小六なる」地藏一基。赤河氏は萩焼深川窯元の陶工である。数100米離れた萩焼深川窯元宅の裏手の山に近年まで地神盲僧⁽²³⁾が居住していたという米山寺址⁽²⁴⁾があり、その入口に天明七年の「回國供養塔」ならびに「六十六部奉納大乘妙安日本回國 武州崎⁽²⁵⁾玉郡 孫兵衛 羽生午子林村」などがあり、この辺りは諸国回國修行者の一休止点であったかと思われる。

以上、『防長風土注進案』及び柳田国男の論に基づき、俊寛塚の現地調査を試みた。

『注進案』の企画編纂は天保12年、当時亀王18代。ゆえに27代本位に単純逆算し、また松の樹齢を勘案すれば、概ね1500年代後半乃至1600年代前半頃の造塔かと思う。『注進案』はこれを李勺光の墓とみる模様であり、然りとすれば寧ろこれを萩市椿東の唐人山の窯近辺に建つべき可能性(本人は初代にして萩在住)が大きく、不審も残り、その間の経緯は不明である。

事実としては江戸後期以降、A俊寛説とB勺光説が対立しているが、次の如き私見も可能であろう。この塚をA・B何れか1つに比定することは必ずしも妥当とは言えないかもしれない。即ちC遠くは俊寛、真近くは勺光に代表されるが如き運命をたどった多くの無名の人々のそれであるやもしれず、ABはその代表的名目と考えることは可能ゆえ。

塚の存在意義 一般に寺院がその由来を開祖止錫の地に求める如く、また薩摩の俊寛伝説現地調査のおり、阿久根であったか出水であったか、かの地の郷土誌に伝説を密漁禁止の庶民教育に結んでいた如く、伝説は虚実あい交えつつ今日的存在意義を有している。その虚と覚しきを削ってこれを史とみることに何ほどの意義があらうか。伝説は伝説としてこれを保存・展開させるの外、ないであろう。秀吉と家康の対朝鮮政策は対照的であり、後者はこれに和をもって結び、慶長9年、朝鮮使節が来日し、諸街道に一里塚が築かれている。そのような時代の雰囲気のうち、平家の東大寺焼打に対し、頼朝がその大仏再建を以てのぞんだ如く、日朝古今を問わず前述A・B・Cを含む意味において前代の凶を慰霊する意義において建立せられた塚かと私は思うが、伝説のこととて妄想の域をでない。しかし、この塚の由来が人生の途なかばにして不幸にも行き倒れとなり、その生国に帰り得なかった人々の慰霊にあることはほぼ確実であろう。

脱稿のうちに 薩摩琵琶聴取記

9月27日、本稿を書きおえ、夜、9時半頃、途中から乍らNHK教育TVの琵琶演奏を聴取した。途中の字幕に邦楽百選・(演)鶴田錦史。演題は不明だが、語り内容は平家卷11「壇ノ浦合戦」の条であり、語りの詞章は平家本文に抛りつつ、これを縮約しているものと聴きうけられた。語りの速度はかなり早い。一般に平曲はもっとゆるゆると語られるものである。フラットは5つ。ほぼ三角形の大きい撥が印象的であった。女性的な筑前琵琶に比べて薩摩琵琶には合戦物がよく似合う。其後、TV、琵琶製作者と製作工程の紹介、30年位まえから石田さんという方が奥さんのよし子さんと共に製作、東京ではここ一軒だけの由。胴を接着剤ではり合わせ、ネジ状の工具で圧力をかけて接合を強化し、サオの首(殆ど直角)に焼火箸の親方の如きで調絃軸の軸穴を焼抜く糸が印象的であった。(壇ノ浦合戦八百年後の9月28日記)

(昭和60年9月30日受理)

Handwritten musical score system 1. It consists of three staves. The top staff is a vocal line in treble clef with a key signature of one flat and a common time signature. The middle and bottom staves are piano accompaniment in treble and bass clefs, respectively, with a 4/4 time signature. The piano part features a rhythmic pattern of eighth notes in the right hand and quarter notes in the left hand.

Handwritten musical score system 2. It consists of three staves. The top staff is a vocal line in treble clef with a key signature of one flat and a common time signature. The middle and bottom staves are piano accompaniment in treble and bass clefs, respectively, with a 4/4 time signature. The piano part continues with a rhythmic pattern of eighth notes in the right hand and quarter notes in the left hand. Japanese lyrics are written below the vocal line: おは じき へ も 3 = し

Handwritten musical score system 3. It consists of three staves. The top staff is a vocal line in treble clef with a key signature of one flat and a common time signature. The middle and bottom staves are piano accompaniment in treble and bass clefs, respectively, with a 4/4 time signature. The piano part continues with a rhythmic pattern of eighth notes in the right hand and quarter notes in the left hand. Japanese lyrics are written below the vocal line: ん じ の

First system of musical notation. The vocal line (top staff) contains the lyrics: "さうが い にま ん じの の". The guitar accompaniment (bottom two staves) includes rhythmic patterns and chordal structures.

Second system of musical notation. The vocal line (top staff) contains the lyrics: "く い じく - は". The guitar accompaniment (bottom two staves) continues with rhythmic and harmonic accompaniment.

Third system of musical notation. The vocal line (top staff) contains the lyrics: "おんま づ びん じ - ちま づ びん じん てが - き". A star symbol (*) is placed above the guitar staff in the third measure. The guitar accompaniment (bottom two staves) features a more complex rhythmic pattern.

Handwritten musical score system 1. It consists of three staves: a single treble clef staff at the top, and a grand staff (treble and bass clefs) below. The top staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes. The grand staff contains a piano accompaniment with chords and moving lines in both hands. There are some handwritten annotations in the top right corner.

Handwritten musical score system 2. It consists of three staves: a single treble clef staff at the top, and a grand staff below. The top staff has a melodic line with a handwritten note 'ニハク' above it. The grand staff features a piano accompaniment with a change in time signature from 4/4 to 5/4, indicated by a '5' above the staff and '4' below it. The notation includes various rhythmic values and accidentals.

Handwritten musical score system 3. It consists of three staves: a single treble clef staff at the top, and a grand staff below. The top staff continues the melodic line. The grand staff continues the piano accompaniment with chords and moving lines. The notation is consistent with the previous systems.

Handwritten musical score for the first system. It consists of three staves: a vocal line at the top, a piano accompaniment line in the middle, and a bass line at the bottom. The vocal line begins with a rest, followed by a melodic phrase. The piano accompaniment features a complex rhythmic pattern with many sixteenth notes. The bass line provides a simple harmonic foundation. The lyrics "よしきこみ" are written above the second measure of the vocal line.

Handwritten musical score for the second system, primarily piano accompaniment. It consists of three staves: a vocal line at the top (mostly empty), a piano accompaniment line in the middle, and a bass line at the bottom. The piano accompaniment continues with intricate rhythmic patterns, including many sixteenth notes and rests. The bass line continues with a steady harmonic accompaniment.

Handwritten musical score for the third system, primarily piano accompaniment. It consists of three staves: a vocal line at the top (mostly empty), a piano accompaniment line in the middle, and a bass line at the bottom. The piano accompaniment continues with intricate rhythmic patterns, including many sixteenth notes and rests. The bass line continues with a steady harmonic accompaniment.



